石泉教学の現代的意義

毛利勝典

問題の所在

従来、浄土真宗本願寺派にあつては江戸期、各地方において宗学の研鑽がなされその地方独自の学派が興隆した。しかしその後、学林の台頭や、大学の創設による西欧からの学問方法の導入によつてそれぞれの学派に属さない独自の研究者が増えることで、各学派は次第にその学問的影響力を失つていったのである。しかし今日の真宗教学を考える際、研究者は自らがどの学派から影響を受けどの学派の視点を持つて浄土真宗を捉えようとしているのか、そのことを意識化できないほどに江戸期宗学の影響を受け、またその影響を無前提として自らの学問的立場を形成しているのが現状である。従つて、研究者はその影響を受けながらも自らの立場を客観化できず、このことが今日の真宗学の閉鎖状況をつくつていて、いつても過言ではないし、このように江戸期宗学の枠を出ない形で今日の教学は形成されているのである。従つて、教学

の現代化を問題とする際には自らがどのような江戸期宗学の影響の元で教学を構築しようとしているのか、あるいは場合によつてはその影響によつてどれだけ教学の現代化が妨げられているのかを問い直し、研究者自身が歴史状況における自らの学問的立場の相対化・客観化を行うことの必要に迫られているのである。

また、教学の現代化とは、宗学の歴史的限界を明らかにするという意味ではそこに教学の歴史的発達・展開を認めるということであり、また一方では現代という時代の問題を真宗教学の視点から明らかにするということ意味では、そこに歴史を超えた宗教の存在を認めるということである。こうして、教学の歴史的発達と宗教の超歴史性が明らかにされた時こそが、新たな教学が構築され、また教学の現代化がなされた時であるということができるのである。

ここでは、上田義文氏の論文（『教学の現代化』とは何か―根本的理解の一つの試み―『真宗教学研究』所収）を手掛かりに

教学の現代化を問題とする際に留意すべき点について触れつつ、江戸期宗学の一学派、石泉学派の祖・石泉僧叡（二七六—二八二）の学説を基に、その現代化に果たす役割について考察する。

「教学の現代化」とは何か

上田義文氏は教学の現代化の問題に関して、先ずこのような問題を促す現象としてどのような事態が起こっているのかを教団の現場を通して明らかにされ、一方ではそのような現象の根本には世界的視野においてどのような問題が横たわっているのかを考察されている。そしてその上で、教学の現代化に対する宗教者の根本的態度について、いかに現代人として歴史的視点を持ち、またその一方ではいかにその歴史を相対化する宗教的視点を確立しているかが、宗教者自身の主体性として問題となることを主張されておられるのである。

教学の現代化を促す現象としては、浄土真宗と現代との乖離が原因として挙げられるが、そこには近代化・世界化・世俗化の問題が根本的問題として横たわっていると言える。そして、これら諸現象が「一つの世界」を形成しつつあるのに対して、伝統的宗教は「独りぼっちの遊離した状態」「離れ島」の状態にあると言える。従って、教学の現代化とはこの両者を陸続きにすることに他ならないが、そのためには教学

の現代化をこれらの現象を通した自らの根源に関わる「自己の存在の問題」「人間の問題」であると捉え、この問題からの問いかけの中で伝統的宗教は「既成の教義や教義学を脱ぎ捨てる」ことが必要となってくるのである。

ここに教学の現代化を「自己の存在の問題」「人間の問題」と捉えると言うことは、近代化・世界化・世俗化の現象の中にある現代人の生き方の問い直しの中で、教義・教義学が生まれた元の源—親鸞の教えが生まれた親鸞の宗教経験自体「信心」—に還っていくことにより、そこに「離れ島」から「一つの世界」へとつながる新たな宗教経験の解釈、あるいは表現方法を生むことよって、逆に現代に通じる宗教的な新たな生き方を生むことを意味している。つまり、教学の現代化がなされるためには、研究者が現代人の生き方をどれだけ「人間の問題」「自己自身の問題」として主体的に問い、自らの宗教経験を通して親鸞の宗教経験自体をどれだけ根源的に学び得ているかが問題となる。また、そのことがひるがえって現代人の生き方を根源的に問い直し、親鸞の教えを自らの生き方の問題として現代の中でいかに課題化し実践しているかという問いとなってくるのである。

こうして、真に歴史的な存在は超歴史的（宗教的）自覚を持つ者であり、また逆に、超歴史性としての宗教は歴史的なものにおいて成立するのであると言えるが、この両者の関係

の中で自己を根源から探求し眞の自己を主体的に形成する者によつて、教学の現代化は達成されるのである。

石泉教学の基本的立場

石泉教学は、宗学のほとんどすべての領域にわたつて特徴があると言ふことができる。これは石泉教学が石泉僧叢という人格の実存的立場・主体的立場、上田氏の表現に従うならば「人間の問題」「自己自身の問題」として親鸞の教えを學ぶという石泉の學問的姿勢と、彼の學問方法が一致し、宗教經驗を通した超歴史的視点からその學說が成立しているために、一部の論理だけを取り上げその學說の正しさを求めるという方法では、その教学は決して理解できないことを物語っている。ここではその特徴の基本的な部分について教学の現代化という視点から取り上げていく。

1、善知識（歴史的人格）の相対化と本願の絶対性

先ず石泉は、浄土真宗は釈迦・諸仏・七祖・親鸞等の祖師（善知識）による建立ではなく、如来の自証としての人格的には阿弥陀仏、法は第十八願そのものの展開であると考えている。

抑浄土真宗は、五百年千年のことに非ず。其來歴を尋れば、久遠実成の甘露滅にして、其始は法蔵菩薩の所建なり。（中略）此浄土真宗の体は、法性に依りて二諦に順する所の如来の自証なり。此自証を全して浄土真宗となる。（中略）此か人なれば阿弥陀如来。法なれば十八願なり。此人法一つの浄土真宗なり。（『教行信証隨

聞記）

浄土真宗は、廢立が大体なり。相承の善知識より創るに非ず。如来の發願よりして廢立なり。選択と云か取捨の義にして。法蔵菩薩の初發心なり。久遠の最初よりして廢立の發願をなし給ふことなり。故に此願に依て成就する正覺。亦廢立の正覺なり。超驗十方一切世界にこしらへた廢立なり。勝を立て。劣を廢す。弥陀因果みな廢立なり。（同）

石泉は相承の善知識（歴史的人格）よりも阿弥陀如来と第十八願を優先させ、その超歴史性と自らの主体的立場・実存的立場での宗教經驗を尊重している。それを証拠には、ここで石泉は如来の發願そのものを廢立と述べているが、その一方では、俗諦論（生活論）においても『菩薩戒經』の文（『教行証文類』化身土卷）を解釈して、

凡そ出家たる自分。仏弟子たる者。三世諸仏解脱幢相の服たる袈裟かける者は。俗に向て禮拜することは無きことなり（同）

と述べ、念仏者の生活実践として国王不礼という廢立が成立していることを明確に述べるのである。念仏者の生活上での廢立は信心（宗教經驗自体）を基として成立しその根拠は第十八願であるが、その根拠を語ること自体が人間の宗教經驗として成立していなければ生活上での具体的な廢立の問題を論ずることはできない。従つて、ここで石泉は超歴史性としての阿弥陀仏と本願を根拠とする信心（宗教体験自体）に基づいて、その主体的立場・実存的立場から生活上の廢立を語つ

たと解釈できるのである。

従来、宗学においては歴史的人格としての善知識の言葉を絶対的なものとし、七祖、親鸞、そして親鸞以降の列祖の間に相違を認めず、それら総ての言葉を超歴史的表现・絶対的表现として解釈してきた。しかし、先の上田氏が、「現代のわれわれと鎌倉時代の親鸞との間に成り立つ同一性は、超歴史の名号あるいは本願海の同一性であり、歴史の産物としての教(言葉)の同一性ではない。…弥陀の願海に入った人は、必ずしも親鸞の言葉によって、語らねばならぬことはなく、妙好人その他の人に見られるように、自分自身の言い方をする事ができる。」と語られる時、念仏者は言葉やその言葉を生む歴史的人格としての善知識を通して本願海(宗教経験自体)に参入するとともに、そのことによって逆に超歴史のものとしての歴史的表现を行うことができることが分かるのである。ところが、これまでの善知識を超歴史なものとして絶対者(阿弥陀仏)と同一視し、またその言葉を絶対化する立場からは、言葉そのものに捉われ言葉を生み出す経験自体に参入しない、あるいは参入したとしてもその経験を言語化しないことによつて、どのような方法によつて信心(宗教的経験自体)を得られるのか、またその参入によつて信心を得られるのか、またその参入によつて体験者がどのような自覚が生まれるのかという問いに対して答えることができない

のである。このような学問的姿勢が先に挙げられていた浄土真宗と現代との乖離という事態の原因となつてゐることは言うまでもないことであるが、宗学では歴史性と超歴史性の区別が明瞭ではなく、このために言葉や人間の歴史性が問題とされないために逆に超歴史なものとしての本願海や信心といった宗教経験自体を明らかにし得ず、このことが却つて言葉の硬直化や善知識の権威性を生んでしまつたのである。

また、特に問題となるのは、このような歴史的人格の歴史的境界を問わないことによつて、善知識の差別的表現を超歴史・普遍的表現として捉えてしまひ、差別問題や政治問題を真宗教学の課題として捉えることができず、逆に宗学が差別を温存助長し今日の政治情況を無批判に肯定する役割を果たしていることである。

これらの問題について、石泉はあくまで弥陀の本願を絶対性を主張し、逆に歴史的人格としての善知識を相対化することによつて、浄土真宗における超歴史性と歴史性、あるいは超歴史的な宗教経験自体を語ると同時に、他方においては浄土真宗の歴史的境界についても問題とすることができると示唆しており、このことが教学の現代化において大きな意味を果たすと言えるのである。

2、教学上の真宗列祖相対化

また、前項との関連で石泉は真宗教学史上の展開を絶対視

せず、あくまで親鸞の所説を教学の基礎とし教学上大きな功績があつた列祖の説においても、そこに批判の目を向けている。

行信の二法をいふに表裏前後の二途あること上の如し、共に七祖の伝へたまふところにして、我大谷聖人の如実に相承し、嫡流として家業を開き給ふ、（中略）緒を継ぐの宗主必ずしもその載を同ぜず、宗昭師のごとき、多く前後を言ひ給ひて、その表裏の説漸くに罕なり、信証院いよく倣ひて、遂に専ら前後を用ひて、もて教道を清規し給ふ、

（柴門玄話）

これは行信論の学説「法相の表裏・稟受の前後」について説明した部分であるが、石泉はここで歴代の宗主が必ずしも親鸞の本意を継いでいる訳ではないことを、覚如・蓮如を例に挙げながら論じている。このように、石泉は親鸞教学を基礎とし独自の教学を展開したのであるが、これは石泉にとっては善知識（歴史的人格）としての親鸞が重要な意味を持っていたからであり、逆にその他の宗主はそのような善知識としてはあまり重要視しなかつたためではなからうか。また、歴代の宗主は勿論のこと、親鸞を本願寺教団の統率者として権威者の発想をもつてはその教学を重要視しなかつた点も、石泉の学者としての公正な態度であつたと言ふことができるのである。

このように、教団の現状からではなく、あくまで本願の超歴史性に立ちながら親鸞教学を基礎として自らの教学を打ち立てた石泉の姿勢は、教団の存在意義を考える際にも大きな

意味を持つていると考えられるのである。

3、親鸞教学の時代的境界

石泉の如来論の特徴として十劫成仏説を挙げることができ、この説は今日の真宗教学の主流が久遠成仏説を立て他の諸仏を阿弥陀仏の下位に置くことによつて、家元主義的な閉塞した意識や権威主義的意識を持つているのに対して、これを否定する役割を持つている。また方便法身の意義として石泉は「法義の分齊」として他力法と自力法の違いから阿弥陀仏と諸仏の違いを語っているが、さらにはその根拠として衆生の無明性を強調するならば、主体的・実存的立場として「人間の問題」「自己自身の問題」として現代人の無明性を根源的に問うた上での如来論を成立させる可能性が存すると言ふことができるのである。

しかしここで問題としたいのは、親鸞自身は十劫成仏説と久遠成仏説の両説を採用しながら、石泉は、

謂く、我が邦は台教に縁有り。讀主開宗の日、弘通なお盛んにして、時俗多く久遠に執す。忽ち十劫説を聞きて、轍その親近を輕侮す。（乃至）乃ち随転理門に就いて、特に久遠の説を為す。

（三帖和讃觀海篇）

と述べ、鎌倉時代当時天台教学が盛んであつたためにその影響を親鸞は受けたがそれは浄土真宗の本意ではないとして、久遠成仏説を斥けていることである。このことは親鸞の教え

と言えども歴史的影響を受け、その歴史的境界について石泉は充分に意識していたということが言えるのである。

4、内在的超越としての信仰構造

さて石泉の信仰構造についてであるが、先に石泉の実存的立場・主体的立場と彼の学問方法が一致し、彼自身の宗教経験の上からその学説が成立させている述べたが、このことを具体的文言で論証するならば次のような例がある。

仏の廻施する初と衆生の受得たる後と法体たゞ一なるが故に、仏心即大行にして南無阿弥陀仏を内に在りて信心といふとなり、かくのごとき信心潜隠してしりがたし、潜隠の信心より大行の称名生起して願力の法体露現す、その露現するものをもて願力の大名なることを顕すなり。

〔柴門文話〕

このように、石泉は衆生の心に内在する信心より大行の称名が生起しそこに願力が露現すると述べている。一方、親鸞は『唯信鈔文意』において如来が一切群生海の心であると述べ、その心から如来が形となって現れることを、「この心に誓願を信樂するがゆへに、この信心すなはち仏性なり、…この一如より形をあらわして、方便法身とまふす御かたちをしめして」と、如来が法性法身より方便法身へと形を現すこととして述べている。親鸞は、このように如来示現の過程と衆生の信心の生起が切り離せないことを重視しているが、この関係を行信の關係で述べたのが、石泉の先の文である。

このように親鸞、あるいは石泉においても如来は単に衆生と対象的な超越的存在として捉えられているのではなく、衆生において内在的に捉えられつつ超越性が語られている点に特徴があるということができる。このことは世俗化において、これまでの対象的・客観的な存在として捉えられた超越者の存在を強調する認識論的思考が否定されつつある中で、新しい宗教（浄土真宗）の方向を示したものであるということができるのである。

おわりに

石泉僧叡の学問的立場が江戸期において異端とされ、その逆に正統とされた学問方法が今日の真宗教学の閉塞状況を形成している以上、その学問方法によつて現在の教学を問い直す意味は非常に大きい。また、その教学は現代の問題に充分応え得る内容を持つているが、それは石泉が現代に通用する新たな学問方法を用いたということではなく、親鸞の学び方に忠実に従い超歴史のものへの洞察によつて、逆に歴史的なものの限界を認識していたからに他ならない。（註省略）

（キーワード） 教学の現代化、主体的立場、歴史的・超歴史的、石泉僧叡

（龍谷大学非常勤講師）